

白衣のポケットの中 医師のプロフェッショナリズムを考える

宮崎 仁, 尾藤誠司, 大生定義 (編)

この数年、「プロ」という言葉がどこの職業分野でも簡単に使われてきた。しかし、「プロ」とは誰か、その資格のありようは何か、誰が決めるのか、そんなことはお構いなしに安易に使われていたところがある。

では、「プロ」の職業人のありようとは何か。ひとことでいえば、その集団の1人ひとりが、自らを律し、その集団全体が社会からどれだけ信頼されているか、評価されているか、であろう。グローバル時代になつては、この社会が国内だけでないところも、この問題の背景にある。

このような自覚と意識と、日常的な行動に裏打ちされた職業人の集団をめざすことが「プロフェッショナリズム」ということもできよう。

医師は、歴史的にも1人ひとりが「プロ」であることを求められてきた。しかし、医師以外の人たちからはいろいろな見方をされ、「Dr. コトー」「ブラックジャック」「神の手」「赤ひげ」などの多様な医師像がある。1人ひとりが持つ医師、医療機関などの実感と期待するイメージとの乖離もあろう。社会の変化もあって「クレーマー」「モンスター」患者も増える。「医の倫理」に始まり、「To Err is Human」などの「医療事故」に関する報告書や「医療訴訟」の急増、さらには「医療崩壊」などの背景にはこのような社会からの医師への作られたイメージと実態との乖離もあろう。

しかし、医療も医師も「医師全体」として一般社会の評判が形成され、定着してくる。医療や教育制度が重要な社会基盤的なものである以上、医療制度も医師育成制度も、その社会の文化や価値観、歴史的・経済的背景などを受けたものであり、かなりの部分は個人的な経験の積み重ねからできあがる。「プロ」といっても、このような枠組みでの「自己」の評価であったことは否定できない。

では、どのようにして「プロフェッショナリズム」が育成されるか。これはお題目ではない。医学教育、臨床研修のカリキュラムでもない。これは医師になる過程、医師になってからの臨床教育、研修、診療の現場で、日常的に周りの同僚、先輩、指導医、ロールモデル、反面教師、メンターなどと、多くの現場で出会い、感じ取り、仕事を振り返り、成長していくものであろう。とすればできるだけ多くの医師と臨床の現場で出会うことが若手育成の基本となろう。従来からの「タテ社会構造」での教育研修だけでは、将来への人材育成には不十分であろう。

グローバルな世界がどんどん進んでいくからこそ、若いときから、多くの現場を知り、交流し、出合いを増やすことで、お手本となる「プロ」に遭遇する機会が増える。共通の目標となる、医師の世界、医療人の世界に「プロフェッショナリズム」が形成されていく。このような医療人が多いことは、開かれた社会の、国民の誇りになる。これが理想であろうが、「プロ」は1人ひとりが理想をめざし、より高みへと研鑽するのである。

本書の編者とその仲間の若手中心の医師たちが、重層的に数年の交流、議論、研究、実践、行動を通じて築き上げてきた成果を、まず「この1冊」としてまとめてくれた。とても素敵な構成と内容にできあがっている。この多くの方たちの問題意識と活動貢献は、私もよく知っており、いつも敬意を表してきた。この1冊の上梓はとてもうれしい。

「プロフェッショナリズム」について、「今、なぜプロフェッショナリズム？」に始まる3部構成。Part1「プロフェッショナリズムって何だろう」では経過や指針について、Part2「プロフェッショナリズムについて考えてみた」では日常的に遭遇するいくつもの場面を提示し、論ずる。「フムフム」とうなずいて、「なるほど」、「でもねえ」と考えさせる例示が多い。Part3「プロフェッショナリズムを究める」ではいくつかの興味深い考察と、納得させられる行動を促すメッセージがこもっている。

わかりやすく実践的、医師にも医学生にも、広く医療人（皆それぞれが「プロ」をめざしているのだから）の皆さんにもぜひ読んでほしい1冊である。「問題を認識する敏感さ、多様性や変化を受け入れる柔軟性、重要なことをやりぬける強い意志が必要」なのであり、そのような人に遭遇する機会を増やすことも大事であろう。なぜ「ポケットの中」なのか？ これは読んでのお楽しみとしましょう。

政策研究大学院大学教授・内科学/
日本医療政策機構代表理事
黒川 清

■A5 頁264 2009年

定価2,520円（本体2,400円＋税5%）

[ISBN978-4-260-00807-5] 医学書院刊